

## 学校への思い2

5月の憂いの季節も過ぎ去ろうとしているが、まだ憂いの中にいる生徒たちもいることは事実です。

様々な人間関係や、将来への不安の中で、少し歯車がかみ合わなくなると次第にぎくしゃくし始め、正直学校という存在が煙たくなっていくだけではなく、できれば少し遠ざかりたい場所として変わるのでしょう。一人何処かで悩んでいる皆さんも間違いなくいるのかと私は心から案じております。

学校がその人の生活の隔てになるなら、遠回りするなり、ちょっと休んでみるなり、よけて通るなり道はいろいろあるのです。たどり着くところへ行くことは、たくさんの生き方があってしかるべきです。大人になってから振り返ればなんということはないという過ごし方ができれば、それも一つの成長だと思います。

あまり、自分を責める必要はありません。焦らずに、慌てずに行けばそれはそれでいいと考えます。

一人の存在は、たくさんの存在とかかわりあっています。そのことをもう一度思い出して、次の一步を考えてみればいいのではないのでしょうか。

こうしなければならぬとか、こんな自分ではいけないとか、道を狭める必要はありません。

幼虫が、羽ばたくまでには、さなぎの時期が必ずあるのです。さなぎになって次の進歩を待たなければ、羽ばたくこともないのです。

まず、毎日を規則正しく、生活のリズムを大切にしましょう。音楽を聴いたり、画集をめくったりして、時間を過ごしてみましょ。空を流れる雲を見つめてもいい、鳥のさえずりを訊いてみるのもいい。

私の好きな小説家の村上春樹は、井戸の中にいる姿を様々な物語の中に描写します。深い井戸の中で、一日の中で1分ほどやってくる日の光の到来を待つ男の話は、そんな時代があった自分の存在を思い起こした経験があります。ずっと、井戸の中から、今に戻れる通り抜けを描写している物語もあります。

暗喩と象徴によって小説世界が私に教えてくれたことは、通り抜ける道があるというただ一つのことでした。それは突然訪れるのです。

自分を許すこと。翻って、他人の存在を認めること。そんなときにその道は訪れます。

学校にいても、家にいてもその時は必ず訪れます。自分を責めることなく待つことも大事なのです。

